古今
奇談

蕅匂冊

へ遠13
2017
3

阿へ 13
2017
巻 3

古今奇談莠句冊第三巻

話

㊄ 絶間池の演義 強頸の勇衣子れ智あり

絶間池の東成郡に属し。今ハ池涸まども往一の絶ると称す。昔ハ此辺林乃地住て居る浪の移るるあハで絶間の池と成らんハ絶られ池ハ摂河内茨田郡に附う。通ことハ絶間の池の垣つゞと傾ける中と成や志ぬゝんぺ絶るの池ハ一の絶間より二里ばかりへだて太間村にあり。衣子の絶るといふ。太間ハ脱間の訛ぜるなり。あれ絶間芦に茨田の郡を[illegible]ゝ。今ハ図を見るに絶るの事ハ図史に弘絶とう。けるとう摂の小郡に及で霊場をゝれ中に。用茶望子に蓋れ中納言とゝ一類ハ変歌れ考べきなくそ。かゝも新刊の名ゝも切れ。大檀那の面目も[illegible]ぬと思ゝ。ゝ。式ハ主人微ふゝて名とするに足てゞず。式ハ罪あるが通て主名を変ゞ。上代のまハ人に主をけるハを世に托ゝして人の[illegible]

を近くするもあり。地狭弘もるのんハ[illegible]あるべし。也柄の橋柱兵庫
の築島ゝ縁記せる古法一ゝなるべ。のいちゞけるゝハ甲斐国乃
長者の媳れ人枕れむすめあるゞよみるとゝ地がゝうハ小児を喰し
眠りを誘ゝ乃戯ゝとなり。西成の北爲れ上下れ地ゝ切ゝ木のゝし
ゝ紙塚ゝ[illegible]れバ。不擇をゝ橋柱の迷すゝとゝゝ橋ハ嶮峻天皇の
時勅ゝて西生ゝ造ゝれ平安の京ゝ往来して。大江の渡れ辺ゝい
るの大路ゝ俊宜ゝ[illegible]橋ふるべし。豊崎の名柄済ハ百又六十年の
昔ゝあり。大内村ある産神帝の大隅宮ハ又百又十年をへゞてなり。彼
也帝勅の設けゝハゝざるべし。古昔ゝ辺ハ水乃ゝ渡ゝて氾濫れ乃す
るゝふく。仁徳れ御宇ゝ浪華の水乃ゝ治めあひ。二室の堤を築て澪水
を三国川ゝ[illegible]。名柄川を渡くす。ゝられゝ辺狂常ゝ水淀めむ。
殊ゝ内の国ハ九河内と名づけて水淫の地なり。西北の巨川を防

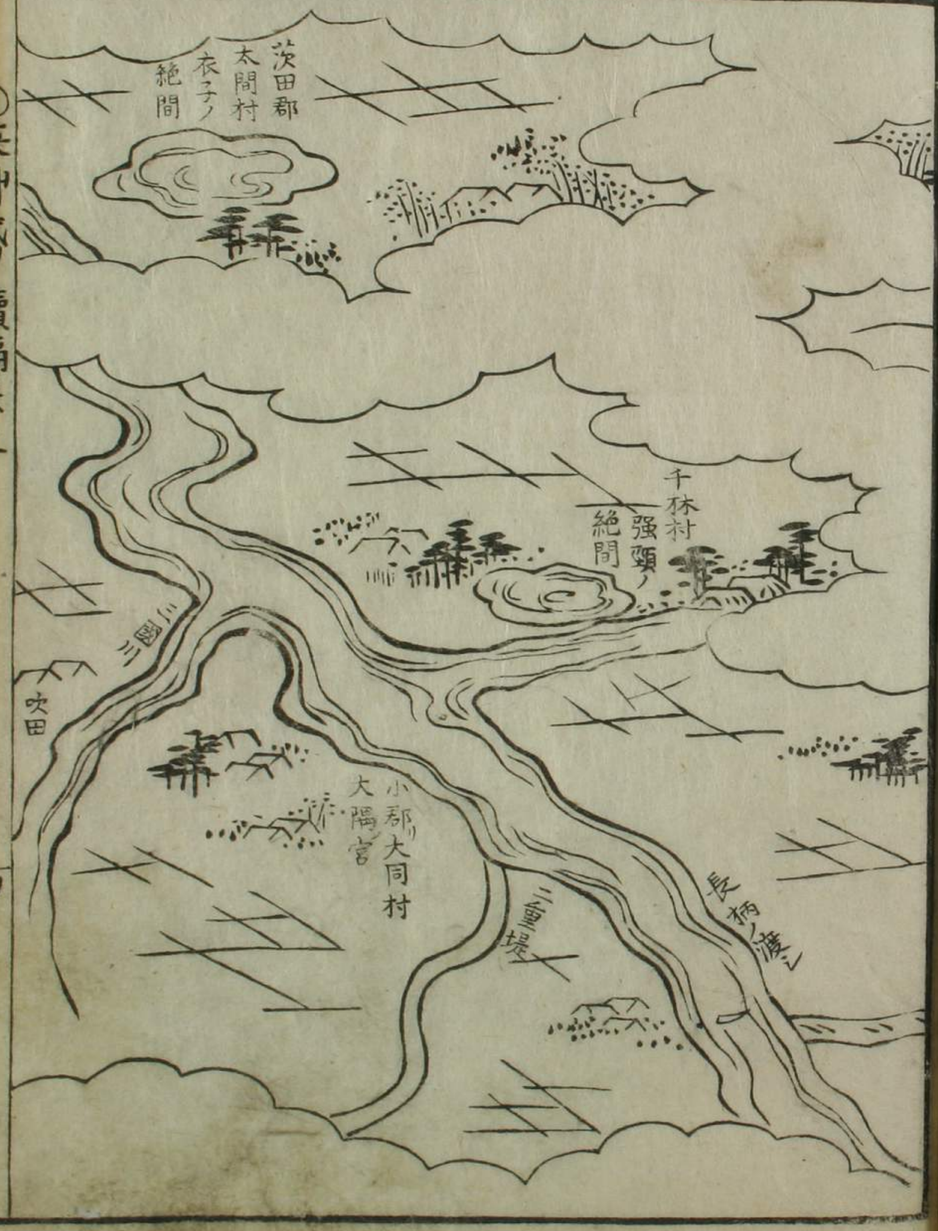
きゝる堤を茨田堤ゝいゝ。霖雨洪水ゝ必ず壊れ損し。決口ゝ不乃
て。幾ゝび築ても土を保ゝず。ほし御代ゝ勅命ゝあゝて。古堤の縄準と
も改めて堅固ゝ造ゝせ。ゝ[illegible]因地川なども堀せゝれ朝議ゝあり
て。人ハいまゝ苦ゝ為ゝ[illegible]ゝ水乃の水除ゝ穴居せゝ陰敷。
ゝくも窠ゝ林ゝ山渓ゝ[illegible]て。不ゝ[illegible]ゝ貍れ魑人乃ゝ
食ゝ寇ゝ霊妖ゝ妻ひ。也人ゝ現し小児ゝ変し。小石ゝ抛う
ち。沙ゝ撒し。人ゝ琴ゝ怖し。因時ゝ喝ゝ[illegible]ゝ孩児ゝ誘ひ匿。
彼ゝ農ぬゝ逐ハしたぶゝる。土地の人且ハ恐ゝ且ハ忘る。茨田の宇
れ庄治ゝ[illegible]ゝ[illegible]の磁窓あり。祖父なるゝの武まゝて新羅ゝ伝罰の
ゝ軍ゝ渡ゝ。彼国大ゝ[illegible]ゝ敗ひて。王の師ゝ王人ゝ。位ある人ゝ衣
馬糸帛ゝ奥ゝて位ある人ゝ請ゝ待し。平人奴婢ハ盒飯壺酒ゝ[illegible]
ゝて彼奴ゝ労同す。熊川ゝ[illegible]ゝ奥ゝて。酒飯ゝ奥ゝて待ゝる。褐色盞

又つ外面のまを洗さて。大國の素燒ようハ孫〻ゝ小後紀の為よ法
ゝして傳。家ヨ傳来し。守れ又器と人もまうて。客人あまを正
を飯器も用ひるゞいろ〻てらかれ子ぐゝんを取ひる時ゝ一
器を失ひとう。主人の乳色もよろ〻かゝび。甚畏を悪しこ後国
れ井ヨ自ら投ゝる伐。家人亀てんゆて又く撈ひあげて幸ヨ死せざ
れども。以来主ゝ病ヨ陥ゝう。彼るゞゝふもを笑あゝバ。押後の自
ひもるすゞさヨ。ゝちの法を掩ゝんるヨを笑を遠しゝうやとこ
ヲ回へゝも。霧ゝ〻ゝぬゝゝやていとん苦しけるゝ。主人熟ゝヨ
拘伐後ゞバ志を失ゝとやらんハ妖除をゝヨゝや。惜ゝ器物ハ褒ヨ
も晴ゝも用ゞゞさいゝれるし。ゝれど用ひざれバゝらをしくもゝヨ
まゝて磁陶の器ゝ餐遊ヨ用ゆるかゝに。損するを悔ゝゆるゞゝヨ
あゝび。ゝハ京我道ちゝゝ。保をゝゝらも公ヨ挽むゝなく快後せゝと

慰めゝれどいゝヨゝ憂のゝゝてあゝゞゝゝし。遂ヨ病て失け
ゞゝ後いゞくゝも完めず。家中ヨ人の嘯多あゝ。人音静りてた
しゝに守つけゝるヨ。伺ゝ言ゞある中ゝなるハえゝ者ゞ多ゝも似る
中ゝなゝ。魂のゝゝてゝゝと畏れて後除の法とやかくゝ。るくも
ヲくゝゝき後ハ家人一不ヨこゞゝて畏ゝ中ゝを完ゞずれヨ
一多二多ゝれど。後涼て守ヨ子ゝに拘すゞゞて背れもしゝ。
公をゝめて守るゝバ裏れゝゝう。五器ハあいゝ。五器ハあいゝと
いゝ中ゝなゝ。公ヨよゝきゝの出て守ゝゞゞんゝゝる時ハ音せゝ折もゝゝ。
多ゝれバ多ハ縮めゞゝ耳をゝバゝゝる後の井の辺ゝヨある
やゝなれバいゝゝゞんゝゞ霊魂なゝとゝゝれて日ゝゝ中ハ後後
ヨゝりの底ゝ法西ゞにより来ゝし千穂の岐ヨゝて。後除のゝと紙
しけゝバ。郷民ゝ土地の社ヨ後ゝせゝる。以男ゝ後守れゝヨまゝ

絶間物語
古代方格

木津社
三岳河
三岳河
大郡高津宮
四万十川
大井川
豊崎


茨田郡
太間村
衣子ノ
絶間
千林村
強頸ノ
絶間
三國川
吹田
小郡大同村
大隅宮
三重堤
長柄ノ濱ノ

て一宿しけるよ。そ夜八稀よ一夢を。明朝後の園よいろうてえめ
ぐし井の内をうくとえ。退いてまだ〜そ乳色を窺ひ。入てひそう
よ人よかろる。実よ井の内よ怨霊こり。未代家の死霊となりて
子孫よ害ゑるさんそえ。思もも無名つきて災厄なるべう候。主爰
を拵ざれい家の難を救ぐし。そえ思を人よわろうて。家れ安堵を
はろうかくとゆ。ゆ人ゆ怪異をゆよ思てよう身さ人病ゆけまいい
とぐ畏き勢ろうて。けえ思を取出して岐夫よ托せ与よ。岐夫服を改
め白紙数枚を用て白幣の切りけしてぐんちが亡母を少て幣の
中心よ書記し。一室を浄め上座よ幣を利立諸て招魂乃業を
ゆし。恭〜く坐して神已よ祈まろと。えの思の箱をそなく玉蓋を
去て取出し。一二ッとかぐくてえッあれば。そそちでゆ改り一人乃
誤り。えいの思はそろひろあをとと取入れて。撲と蓋をしてろ時

よ。そろる幣帛ひうとゆう振動き霊魂あるがめく。ごゆしてええ
今ろて脱まてろとゆ。けえ思を封して迷よ箱下と堅こ切めき。せこて
刺ろる幣をろて。ゆ人と芸よ井ゆ脱こ。井中へ投つまろう。ゆ幣帛
升中よて行水上よ動くやうよろてえる内井底よ沈ろうこ。ゆ人を
を見て眼前よ信を。ろ。ろ時よ人をいて。ゆ井を埋めしむ。ゆ者よ
ア嘴多ゆえず。家内も事静よ。ゆ人の病も快後よ及びろうろ
まても岐まのかぐくろ時ハ分ゆよえッありしうとゆろれど。とかく
拒ろ〜く。あうとえそろハゆ人れも脱まやとそやえぬ。家よ大戸
ゆ木蔓の宮ハ行ろ人方よ絶ざる大社ゆるゆ。いろ乃ゆよりうを主
よ怪拒あ〜それ。白日ゆも人を迷ハすとて。未さぐり乃後ハ。ゆ通人
ゆ〜。社の後ゆる一壇ろき示よ至蓋ゆ。まハ屋ゆて梁上よ張出
を掛紙ろ残掃む。莖よ上り西面ゆれで。摂泉の方海眼下よ湛へて。百

國乃千帆望より入て到る。四面れ山迫より眉のめく深て。まさ景色あるる。近ハ人跡稀より生ものげりて麦の根と埴と腸より乃つ。世の言くさと憂うくも。土地の氏族計りて一人れ術師を請来て。怪物と除き遂ひんとすれ妥ぬ。そ人を卑劣の麻人といふ。をき大里巨麻の辺より人家より倩宿〜居を定めず。厳禁れ法をれて物の怪を祓ひ。某方神呪と用て病を癒め。牛馬の疫までを祈よ。そ効着的ありとんくりてをやらすが。日夜社辺より立めぐりて法をふすよ。妖怪も勢ひ衰へされ芸。いまぐ全く除ぐず。はとくハ呉相の地より逃ようとて人弱怯す。術師はを換ばバ怪物もまさを変じて人をのみと欺く。大戸れ荘家より多志多といふ大農乃寡婦。一子を乳して二十ばりあるが。近ハ奇疫をいて三月ばり。日夜逐て疲労をけりて近る一応を添て。毎夜大熱発狂〜戸外よりとり出んと躍ること幾度す。家族あつまり夜眠せ

をちる。いさゝか眠らんとすれバよく狂ひ出て放出より外を看人絶却序刻の安んぜ。たゞ暁天ようれバ安静よして倦を睡る。一族諸親傍看よりて寄りて寄りる時〜も麻人を請ひ来て祓ひさせる。麻人来ア見てよく我を請招ばバ労れよいとど。我ぐ祝法をもハを寄ろ安堵せ〜めんとくよりにゆうよ。そ表〜より任せられバ後具して祈よる例あり。是の対帛よわぐ。そ卑上の物をなる。ゆ端れ吉葉物として。左右より抱れ机をとゝ。頂巔の吉葉物としてそいくぎの髪一刹をおろして。若より包こ納め是をいて祈より告〜と。祈祝を授け祝法呪文を頌へ。病ぬれ耳鼻より吹入もて内ゆ寄る。そ衣ハいさゝかも発狂せず。安睡暁よいる。家人皆喜び。いさゝて術師の言葉を奇なりとす。已より七日ふ主れど発狂なられバ。づゆ家人乃夜眠安きををゆ。そ法相模の国人より強頸の村主として大力れ堪えあるて知るのお模

ありくれば。内裏に帝舎ありて。摂河の間に来り寓
せ。妖怪の徘徊ありて。人々を困て土人を下知し。野猫の栖
を。さぐり猟出して。梯おを揮うして殺すと教を知らず。茨田乃
武良司衣子として生れ付たる者と。上地の人徳
者と称ぞ。我出となり下れ民戸に指揮して。貂を拒ぐの利害をおへ
機械を制して雲を以て先を畏す。足よりつく亦近くハあふまず。強
頭八十男の子に妖怪猖獗を生て。いで殺へて強く出を法めんと。乾
糧を腰に。本荒れ荒りよりて。あちこち逍遥して宮れ後乃至臺
に昭えて欲じて云。めに勝景を寂莫の地とるすハ怪物いろ〳〵か
れ業をなす。宿して見ぐめんとるに。至毫のうへハ四方一目なれば
物蔭なし。陽離の内にとて見定めて。立去ぬうとて日残るし。
夜よりて人ちぐ〳〵なる事。陽離れ蔭に潜て居ること。二十日ばかり
れ月のぐりてあ相分明なる時。ちと〳〵と足音して近く来ると見れ
ば。髪を振り被き赤裸にて素足なる美人。大に包めるを脇に負ひ
て梯を杖きかち〳〵と至毫に上りて包裹をひらき褌を出て
を垂ぬ。ハ色もそこに宿して妖怪を捜へんと見れば美形に出立るな
ろぐしとそこに。此厮面正座してあのもとさるゐ〳〵に結び。身を物
じて月井を眺ることめ。両の手に祓を振り両脚を参差に縦に踏
横に踏こと。皆法則あるがゆゑ。口中呪言し念念唱唱を。倏忽として
一陣の怪風吹通りてあてるに。西南れ方より空中を来る抱あり。是
彼怪抱なるんとするを見れば。孔雀髪ぢ〳〵と吹せる女人と見て
素裸なるが。風に乗るがゆくゆくとして空に吊るやと。ぢ〳〵と
して差上るに厮抱さして喝と叫ぶ。怪風散じ抱覆と倒
を抱て褥の上に安置し。枕を以て頭に枕せむ。手仕尾義をる

さんとするに似たれバ。妖怪等が此戯れて人を愚弄するやと。窺ひ
出て妖怪やあると大音あぐるに一聲咲らひ侍ち屋を去りて
逃れ去るを追て家の前まで行ちかたに見失ひたり。今ハ出追ふべ
からず跡より一妖のこりたると急ぎ屋に立還きハ此廝我
より先へ屋に逃かへて来る梓を挫て大に怒り你何廝ぞ
横より来て家令を妨ると梓を振て打来る。強頭も捻ハ知れぬの
ものあれど。打を抱とも世ず。あなたこなたへ拂ひよけて。遂に梓を
奪ひ取てそらさす一打あたるに。此廝眉間を撃れて一梓に眩き
倒れを伏に起あがらず。看く嗚呼神退ましぬ。かゝる時に家の前より把
火を揭げて男女に八人屋に来んとよぶ声しておもしくと
噪ぎ来る。強頭をしく姿をうけて来るものハいかにと問ふ人を失ひて
搜るありとや。それハ男か女か。若き女なりといふさらバあれに泣

声ハ女にてそといふ。旅人立よりみて是こそと従ひて泣く裸こ
そん憂られと家人が布の単を脱て肌を覆ふ。女ハ熟睡のさ
まなり。山口の滴水残りに結びて顔に注けバ。やそく夢の覚るが
ごとく。是ハ宮の屋舞なり。知らずいかにしてこゝにハ来りしぞ。夢んに
もいふせかりしとなげく。強頭を打殺しける廝ハいかん知るや怪物な
るべしと。一同に立より裸袢になしバみ知りまるしもなし。彼ざころ
髪をかきあげてよく〳〵見れバ。落させたる術師なり。かひろけず驚き
きて是故をさとりたるていなり。時に強頭己ハ你らも怪物かと
そこに念されず。子細に申せ。言ざあらバ女も返すまじといふ声
詞をはげしくして此婦人ハ我どもが家の主婦なるが。正月末より病を
ゐて。近頃ハ狂乱を発し。殊に大熱焼がゆく一身に一糸も着させ
ず。只ひたすら戸外に飛出んとす。抱ざむるに力つよくして女乃お

よぶべきよあるべしバ男女数人なられと壓へて曉よりこれバ熱去て熟睡
す。この時八歳も疲おとろへ小まん人八三家あり。一族のんを傾きしむ。
主御師八妻時より近々よ御回して祝法をしてありとて。七日いの
請来さう。髪と爪を剃せて完解乃棄拙を。神呪を授け樒茶を服
せしむるを夜より発狂鎮まり。今よりひ七夜よ及へバ今八拙の気も急
度ろんと元人のあるを眠るとも覚しねよ。戸を引放ちて出る者
す。燒八消ぬ内速ひて門よ出られど。切りこの東西定めり十方へ
分ちてたづねも。我くハ山屋巷のんすとおくられ来て主人を主
へ呼るがうめ。さた。山術師ハいらみて此よ死しるも知ねど。応
へバ初よりあの怪をつけるも。狂ハしくあしもんゆりして急う
しも。術人ハ不ねるとおひ合せると評る。強頭実て妖怪なるも人
ちを怪しられと笑ふ不よ。彼家の男女数人をうまう。母ハ病ハ寝
不依回安らにねて在すを扨言燒火かきよ家内ら乱して
時外よ出て嘆ぎ叫きう。門の守りをおろおつられるりかを像
よ化拙の来りざしをそ天乃のひくあるべしとい言のをちう
ぬよ。山姫人ちれ人の外を潜りうえ毛数とあるられ尾を曳て
祝かくかけ去る。強頭も再ひ壮きるう後の憑拙よ家我恩お
くしと一日よ家内へ立りる。山内なる病姫ハ眠さめて覚るも
気を知ず。拙も解てん快ちること常れ。変化の技不謂きあ
ま。此病よ家人の労れる間と。術師の奸計をなす邪念の者よ変
して。病家ハ連累ちて。御所の急湯をあざむく妖怪なるべきよ。術師
れ歳令ハ速報人乃ちを俗りるるくし。強頭うて気を人よか
う知ひ柄とす。衣ふ作人呼て刀髪をとて姫人を勾引ちる乃邪
御ハ我神国ちて効あるべしす。元う姫人の髪爪を人よ与へて

受戒などすることハ新れの法ちがゝ
して神霊の在ある人ハ乱れもるゝ所なれバなり。千里巷の間を行かゝ
ハ妖術幻術の二つあり。妖術ハ行ひと妄語をとも。大東武烈の国を行ハ
るゝ所なし。漢土を勝れ一つなり。元来是ハ恐べきことあるを。武
人をして幻術をかりて妖術の姿をえなし人を誑惑し。穢物ある
やうをして人を惑ハ。必そ[illegible]ぼ志れ人を中を混在ぬてそ[illegible]を襲けを
尋特を執証して人を弘むも。幸破きて後人をバ苦痛しめて誘ひ畏
されて流ものあり。幻術ハ赤漢の時黎軒国の眩人を貢とし戯を
表ふし妖を非ぞ。ぬけさはぬ節ハ武人ぶをつゝし混雑をれバ。一二を心
すへしと守ゞ家のゑ器乃幸を受て。ゐを添て埋る簷下を掘しせ
ゑるゝ。第の内ハ石の白しる我入をてう。元の形を埋ませてを見埋ゝ
るゝを同ゝ。そ家の農監なり。是を岐夫の居所を同ゝ。そ後ハ知

らずとゝ。問究むづきゝもあゝ。びしてゝるぬきゝゝを岐夫の方ゝ窩
ゝ人を使し農四ゝを岐出ゝ。先ハ埋めゝる第ゝ素陶ゝをもも教
入亟なゝバ。年紀て変じゝゝとゝも行をべけきハ。心素陶を入きおき
ゆへと変ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝる今ハゝゝゝ。但ゆゝて主
人ゝゝゝ。約をなせし心力ハ主ぐ主ゝぐ。ゝ変ハいまゝ変ハぐる
ゝやと言伝ゝせゝ。心使ハゝゝち衣ゝゝゝゝ同ゝ。主人ゝてやゞて官
府ゝゝて。岐人ゝ在所をさゞて窮問ゝ。ゝ変ハ已ゝ大和の家民ゝ
あゝゝて布石ゝゝ代ゝゝ。農四ゝハ岐人ゝ似ゝて一変ゝかゝし。
夜嘯をかし第をゝゝくゝるまで一味ゝゝられバ。ゝ人ゝまゝ刑ゝ附
せゝる。井の底の幽変を出ゝんとゝゝ。ゝ時ハ頭を怪穢ゝ浸くゝ入き。
坂ゝ添て言ゝゝすゝゝゝ二三変なれど。赤門れ農体を知ゝ。ゝ人
乳ゝゝゝ術を施す。究竟ゝ弘ゝゝる時ハ戦ゝゝゝゝゝゝ言ゝあ

よくしと。皆岐人が教へるとぞ。妖怪ものつてふより此類の話伝も而
に窮りて。後ハ狸も傍観をやめしぬらん。是のみならば河をへだて
たる大阪の古家の辺に前の村日之野といふ店家あり。之野没後十
六十三の寡女を遺し。祖母老ぬれども是を崩し。人に配て嗣せん
とおもひたるが。寡女とも紡績の業もよくし。継女の郷も仕へありしかば
からむつまじく。窓のもとに針線の外他事なし。あるにわくさうし
けれんちかき少年寡人。垣の外に来りて抱やさんと招く。兄弟ハ言
へもせずしてありしが。一日着ちかきに倒として来りければ。手を取る
かなをとみよやと寡女とも出るまゝ。不日言れども聴ず。老母んなら
ぞ小婢に向へども委細も志らず。これにおいて常に招く少人のこと残りく
るいでも少年の亦ハいづことあるに様どろかし。古家れ垣崩ちる
末の老いかさのふれ著つくし其許の息女寡人ともに垣の壊きより

内裁窺がふを。其内ハ狸なんどにてと罵せしが。其後ハ志らすどいふ。
之野のやからこれを聞て常にも此古家ハ狸をむといふあるとて隣の
人おやくにたどひよりて。垣守に許されて内にそしみ入曲くさぐり
求るに。人気あるをも見あてず。すこく丸下恐れ多く進みかがく
さ隅くもありし中にも之野の亡れ子なるなふ与をとて〈ま十八
果はれて肝ちく。世に畏幽霊などのるすを何事もたぬきしといひ
ひて抱恐れせぬが。それがし此亦に一宿して聞にさくべる抱あらバ
まどらへうして見すべしと。其夜ハ被をかぶさ宵よりもて。廉邊に
掘棒を枕として板敷の端に臥しける。二更の比にいたり。屋上天井に
て何とやら騒がしく。物音く鋳くと見れど言きてそよる者ふ与ちお
さひまうけされど。されバそと答へてず狗おどろ身もすくみて ふる
ふくも何でか狸の恐るべきと歯を咬てうん身うちるに。蟷なけまた

くまなく明らかなり。唐人のさまじかる徳ありけるが人近くも立
よらで。それハ門前の者が。何ごとぞとて入りて見るに。主ハ大連ハ
連の直庐せる所ぞ。早く退き出よ。我ハ此比ハ務あるに女客来れバ
外れ人を留めがたしとて。まてまるかたく。縁をふさぎて入れまじく
のいぶせき覚までよまりでるぞ。你化相伯も二郎も戮し来て縄に
かけるぞといふ所に。いひと聲て踏おとろく来るまで。さく新馬の
やく斑駁なる垂髪なるが。手綱掴て早く出ね我家に新婦を
迎へされバめでたしと。あらで大ば汝に喰ハまめんと。それる面
そ見かねても。忘れるたねさなれども。まかり出るあまりて端よう
侍りる時くち迄れ濃き膨巻し面を俯ておすびたる女房を
くらりてかくまで断て哭あるに才ありざなく。かくしてなく抱に
せんと思縄をたぐりよせるハ烏蛇の首にてたるなり。今ハたまらん

ねまり出るを。男子と遁来るに。んかなてくれぬぎに滾びる
まくにおもおぼえず絶入りぬ。隣家の此わろうさなりそをとんも
となく見つがんとて笠まで来りあひ水をそそぎて。やうくられ
が我る玉もなぐほるに立寄りなしと。懲りなく満子乃
さるよう見あられバ。彼女房ハおほそまくに立てんおこせられ
面ハ笹なる踊る野猫に似く。鰐口の如くの実なるとうろほど小俄に
家の内ま眶にありて見る所なし。夜ハひろしく眠そなき。我に志
なる枇杷の樹さへおきまどけしく宅によく。大に労まて抱くそ
でこりれり。此の夜ハ健なる誰か是どち。えらみ合せて十人ばかり
てかり。抱ぐるなどしてあるに。夜ともすがら抱も見えども人多けれど
き甲斐なしやと。次の夜ハ与へ外によん別ある一人をかってひ。卵など
黒の小石を数く袖にしてぼよく樹を枝て円に抱を見んバよぐち

よおぐしとやくそくして。さようひハ南殿の東北廂の端よ向ひ坐して
てあり。二更ばかりころわたどのくはーごろ〳〵とありて。あるあ死のさ
ま言ばかりなしぐ〳〵ぱらそ刀よりさうと発ち。中央よ坐〳〵るハそ
首二ツ並ひ四肢ありて口口口ぱ法人のいよひんごのもくるおりとあるも
ぐるひ法りて。流血ハ刀おのもぐ。爛壊して死ぬるさと
よあ女をもつて婚をあきんとす。やがのせんあ新姻歯ハ〳〵ぐ。
別よ年秋〳〵き女子をえらうそ。我一生二雄の配偶とせんたあるま
でハ婚儀を延ばぐ〳〵とそ〳〵ごのもうよ笑ひうる。ふふとそを
言法ゆて大よいろいろよ程と袖ふるふ石をえて中央のあ面よ投
つあ〳〵ろ。あ〳〵〳〵もんしぬよ。彼云。野人近ばさよあり。ぞ〳〵ハ素笑
を抜ちん。骸奴出ぐ〳〵ぐ〳〵と命ず。よく躍り出るさ長一丈ばら
ア。脇とろ〳〵さふよ眼鼻口傷ちろ。右よよ鉞をとり左よよ干と振り。

打ちあろ石をへぐてそらよのこうよて我〳〵さよ過り来るもあ〳〵涙
殺代の色をれハ行縁して。化の教とつくすうふとんと流めて新
ぐず。中央の人今ハ巴を巨て吾セよとて医ま入りぬ巴とハ行るる
とんろうちあをそのうこさぬうあれちきしてよくふく〳〵う
ある女房のうほどセやをうに。眼細く耳もちさが振むりひて。保さ
ち是要ちよあ〳〵ず。必ず肝を失いぬぐ〳〵ん人ちとむとうめ乳
をぐ〳〵て化られる程をぐけよと。棒を為ぐんとする時。女の鼻
俄よ暢出ると一丈ばろ。あ人の持を鼻よ巻てう〳〵みうぐそ力
歓ちぐ〳〵ば。二人ハ杖を失ひ倒うなきよ。天井屋上崩るくぐう
ア。項垂さるひハ困のもうよまなとハ車れ梅をなぐめくし。涙の
ちうるロを開こ。下なる鼻ちきよ女ようち先吞んとぐれちあ人言尖
簇とあふつがめくうぐこて。滴こうる便涙氣のとく。毒乳汁ようなう

て亂をおつる人魂を亂し惶逃出るも毒気に蒸ぜられ病のもと
に倒き伏て正気なし。ゑ育も幸にをとさん家れ者とのおんあ人
をゑつぐんとて事合せ。をを接けてくりぬそれより秋て人なし。
只三世の老姑ハ孫女れとものこゝろふしがりて。此古家の内にて
あるゝめと注ゝすも理りなる。此上ハ大那れえようゝゝゝゝて
計らんと催しゝゝ。先ゑに農のはるゝ時より堤築の営こゝに
始る。法那のもゝるゝの名人まを率て彼に趨き。王事に勉るの
土功月を累て歩んとする。彼南不の脱るゝ所とまゝび淵となり。
衆ゝびも空に力と費す。此故に監使臣人等ハ苦ゝるゝかゝる水
功れ築らぬゝるハ生人を沈めて活動の勢ハにゝまゝ根脚とる
ゑ。ちゝをゝるの法あるゝを奏ゝるゝつゝて。法國に おほゝて死
刑極る罪囚どゝゝまる。ハに朝廷に元儀あゝて。凡刑人ハ罪を犯し

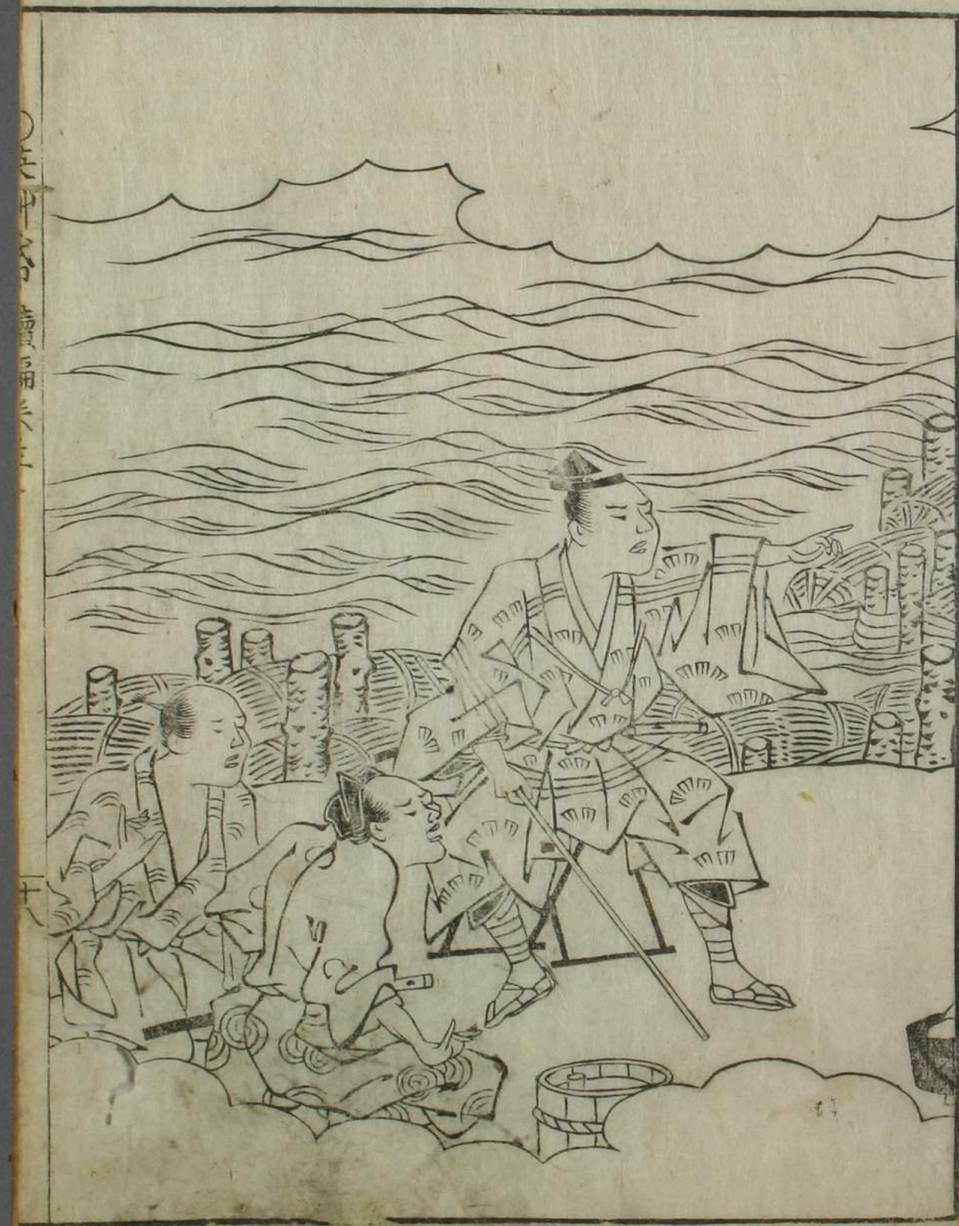
て國の妖孽なれバそゝ其國の利用ゝる堤に用ひらるゝハ告刑を赦
る謂ゝにあゝびゝゝて水に趨ゝゝむるハ。其刑を罪にあゝゝざる
もあんを水庭に水神ありて堤防の成を恐こ。土を拒て脱るゝ
をおさゝむるゝも似られバ。刑人を深しゝとゝず。却て忍らん白馬玉
璧を沈めらるゝに ハ劣るゝゝと逼ゝ乃評議をゝ上奏あゝ保く
憂ひかゝ。一夕の御夢に河伯ゝ告て。我を祭るゝに花嫁の國人
強頭茨田れ連衣子二人を用て築き給て決口合よゝゝゝ詩に
此の日速に二人に花を生て水神の祭りをなさゝゝゝ。えゝゝん剛
ある強頭なるハ欽命を承るゝ隨使下れ脱るゝゝて國用を利
し君まのゝるゝもむく一身にぞ惜むに忍んか重あるゝのゝ
此人ハ用に耐へゝゝゝと。稽ゝる土俵を肩と背に挿て。いざ
や築けと人まに翻ゝあハせ決口の水庭に濯ゝゝる。ゝに剛人カ

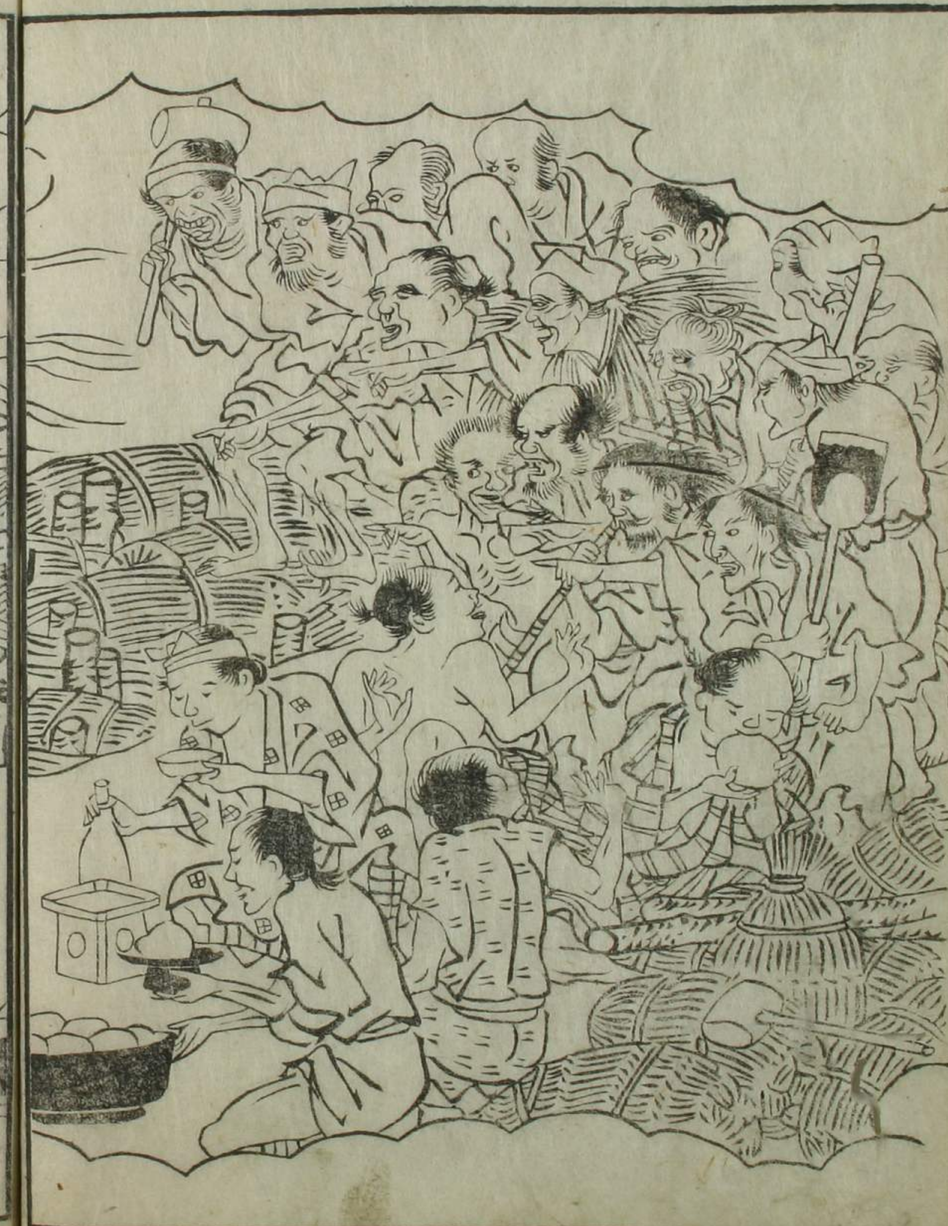
をたく〜敬をかけあひて土儀を揃る程よぶはなく〜ず脚とつけて板をつぎて築さあげるゆなんとするよ此勢氣を脱をる。是より上の決口を築んとて。土功の人ま俄よ場ことこなぐろ。即上れ塊よ押来。あ不の人ま一隊となり。競ひて衣子をとえて沈めんとにくふよひ叫ぶ衣子ハ一荘の长なるめて。常よ忠り能水残拒ぐ也元人名く別けり。はよ衣子ハ遺遥几よ踞けて新色常れ叫くきのよ多り供ぐる酒飯を勧り下て。我敵の人まよ与ちあるこ。加勢のまよ向ひて言をも出ぐず。目をまるて〜ぐ見つりくあるバ。加勢ハ酒飯をもるつぐ。人救せんく波るやくよ減ナを。俟ち揺て一人を投くしめ。清水を泛けバ勉ち老狸と変ず。衣子杖をいて撲て。孽畜妖通ありて霊通ふし。撃殺さんとそくど吉日ふまどバらくて放ちやる。此後你ぐ新族をいましめ此よ穴

ることなく残ゆるぐず。此老狸人のやく言ゆ。いで公命よ遠よぐき。但〜我がりのどもハ先年より水道よ穴ほぐず。此く先代より大隅の実れ国よ棲こ。今空所所となるとも。狸床の下よ棲りてまるをもたとあ居りるよ。近来妖人ありて遠ま棲こ。異形の形怪を使役して我教を逼り出ゆ。家やりう拵どころ我先ひ小児等ハいまぐ穴よもみあれぬもらあく。新どそ〜かこ人家よたより。老婆とあり女人と化して食をめすこうすめ及ぐするがら人よ傷んとする念を紀せりとか。衣子これを聞て老狸をバ放ちやり。今ら土運よ尚つて功成るのはいられりえ来ハ此水勢と計らず。決口の東卑くして常よ水流こるゞ西ゑよ当ます。水神人をえの霊あるバハ二ッの瓢をえ沉めよ。此瓢をえ沉るとあるバこんバ何ぞ水神を重あるとく新ひべき。我ハ当用の死よハ況まぐと鉄壁

る二ツの瓢を決口より投入れられる。忽ち〳〵漂ひて大水よりもれ流れ
と行くまゝのぶり流るゝあれ人よ淀める水の逆る勢ひ知るべし。いざ
此瓢よりきて築けと四方を振て下知し給へば。百人いさゝか力を俟
せち沙れ俵を投入る。一時ばかり脚つけよう。一同に喊を挙て成就
を賀す。先假りの七沙柵をつけく其日八人夫を労らひ息ハセ。彼狸
れ仇をかして。堤を穿さバ。新さに成の河安心をぐり〳〵と。あつさ実に
よ寄りて掃りれ司に請下し。大隅の古文を能閑さんと左人を語
ど。堤築人夫をうつして不虞に備へ。大内へ帰く。彼怒きおほさに庄不
八その時つられて大殿の辺のこ殺まろ。衣るも俱に礼服してひさ〳〵
よをみ乃。夜ちくよびて。さえに躰る〳〵妖怪あらバ出て面せよ
といひても。何のゝらにとてあ〳〵それ出めでこ。雑人百て隈く搜〳〵せん
と計るよ〳〵えるを此の波殿のたまなる局の戸内ろ〳〵けるもに

彼服に因あるべひこそとそこに繊抱の袖に鑿ふせる。年乃やど
伯ひるゞ。袖に一ツの笹をさゝげ。そ〳〵を寅やゝに歩ミ袴をさえ〳〵と
ふゝちして入う来る。正〳〵向ひ合て。襟よをゝみる扇をさて敬
恭しく笹を開き。今八事顕に面伏あり。ゝ〳〵て先代の古晩を
百御貢安の中に。弓月乃秦安として縁不の別面あり。此文に伯あり
て後今の大殿に他注しをる。殲に煩冗ゝ〳〵ぞ伝をくゝまり。竊に
此故実に嵐れ位ミ。わゝ〳〵八出て縁女のゝぞを人孫のお女に者く導
き。静閑自在に不をゝくゝしとをゝだ弓明をとを狸変化現
あゝんと称る。庭上に立る不の者。之聖の教をと化ろかゝめて
姻許の亜不可んと腕をさする。掃りれ司八葵て少もしつゝるこゝし
てとそつうけきど。彼に妖怪の守こあるハいふと語う同に秦安云。
独身を護せんゝ乃先祖弓月王伴来の亜経を弓敬して。朝拝夕礼お





かならず篤く構ふる狐狸野猫などもまさて遠く去る。人として此空
家へ住んとすれバ。必ず驚怖をなして去るべし。さて妖怪のことハ
さらにも知らざる所あり。二女ハ元来篤く通交すれど。近ご
ろハ不在とハ知られずして。却て縫のまざをしてゐるに。女子ハ紡
績れざるにおこたりぬ。薄ぐれに逃避の地に立もとまりて。行の路を残知
らず。故に我此所にとどめて教訓を。何ぞ久しく留むべきとて。彼ち是
を鳴ふ荒るる女官の戸れ口より。両女ハ何とかゑることもなく。此
姫の所に遊ぶとのこと思ひて出きたる。衣子兄弟に問ひ究む。云ちら
ら縫物しけるに。垣を隔て招く少人の姿あるかさまんとて出しが
見失ひて。此古家の築垣の壊きより内を見入まてるように行くさ
かかねこの草にまとひ入ころぶをみて。垣をこえてもみ捉へんとする。
此猫の跡三ツ四ツに数まして去ろしかりければ悩んとするに壊れさ

る所を失ひけり。此姫の出来りてこちらよとてふくらみありて畢
にみんなれぬ珍らしきさまに一日とも見えず。さあひだに縫物のする
ど尖そかひて今にいたるといふ。己に宮女あることも明なればかり
司も所をおき。衣子ハ次にきたり旨をひくて慥めどもいさハめされで
事もなくいふうなくりげなにすこし貌かいはせて。此方の三経とおさ
まずハいかなるたとさまやと問ふ。是ハ漢土のむかし夏の禹王洪水を
治めて後水陸の妖怪を閲し。其形状を筆で。内にハ山海経に図し
外属に祝し。外にハ九鼎に鋳つけて。門前に列べ人民に彼象を
先にしらしめて。鬼神の姦に勝の術。山林に入て逢ハず。魑魅罔両我
身形を人に知らせて八害をなすことあらざるぞ。且山海水源を知て水
利の瑞典なり。物ひと数ずるなまでぞ伝へきたりへど。持る金函の
蓋を去て拜覧せしむ。衣子膝行てそばにさしげゑる。是彼ち金字の山

海経弁ニ図像あり。頃雑人を畏さんあるに出現せる長形ハ皆ハ経の
図ニ似ること。ハ図ニ委しのハ世ニ野猫ハたぶらかしとそひ合せる。
を帖の背紙ニ利の御九條を記を。衣ニ色を一致して大ニ水
学を発明し。ハ中ニ感じ悦ぶ。海の世を那ニ百済王女の経冢とハ。
ハ経をうづして息城の法とかせうとも伝へしう。弓月秦女ハ掃も
ヲとハ〳〵大那の文ニ沒うまう。山海経の水利の功用ある絃吹峯
もるハあるて。泳ぐまぜ羅を宥されぬ衣ニハこ型のあ女を手氣
ニ送うこ。彼強ニようこ工夫をこしし水勢をさう。續て決口
ニ人まを裏めも落ぬ先ニかゝるあるて。伏ハの竹をこう。葛城の杉
を斬らせ楗を柵う。鞆殿れ葦を移さを。磐ゆの危子と撒て土罷
をふせぎ。椿ゝさ千ゝて。狗尾結縷を布を。稗をまを。脱ゐ築
おけせて準縄を改正して下知す。もき木津川の土をりてあるの水乃

の羅ぎあるハ。ハ小ゆ水ニ包まれ常ニ浸淫をれど。ハ内ハ陽
岡あり。陽ハ河ハ床常ニ高くあり。堤ハ年〳〵ニ低くあるゆそ。脇を
厚くつけうて土を寄るニおこゝろぐ。河堤ニハ拉ゆせぬもニ
し。抑ハ土を瘠さを薄ハ土を沈ゝ子ゝとそ。扨水勢を折くニハ
水を鉢ニ入るを。を而ニ左ゝ乱杭石簍竹笹激石を設けて水を
撥ゝを。堅固の振高潤ひゝられバ。笠置川ゝ迫ゝ子挑花の水琵琶
湖を吹来す揺蕩の風ゆるゆ世の変となるぬ落成ニ敵守る
て。強頸が人柱ニ入ゝるを傷まを。脱なんそ生民を惜ニ用ふ
づゝ。凡羅事ニあるうてハ力あるうの智あるうのをゝ。むたゝ
きバ。彼ニ人を用て水神を水係ニ祭ふ。ゆ功を成人あるを。伏
ふくも強くびが勇ニ引ゝると惜まを。落ニ入ゝられぬ生
贄と被ゝして作人ゝ。ハ程ゆどの仇を報ひるや。強頸の脱石

八ッ水潦〳〵迄池と云る。後の世此堅牧唱よ

強頸の舟八さなぐゝれ人柱衣子よりて沈まゞ地を

衣子の古墳八。今古同の東ゆゝ池田村よりるれるゆゝのこ

さうとうやゝ。を縄引て直なる不を衣子縄をといひゝ。後

世さゞらなゝゞ。今此古墳をやらうん

後の人れ口遊よ

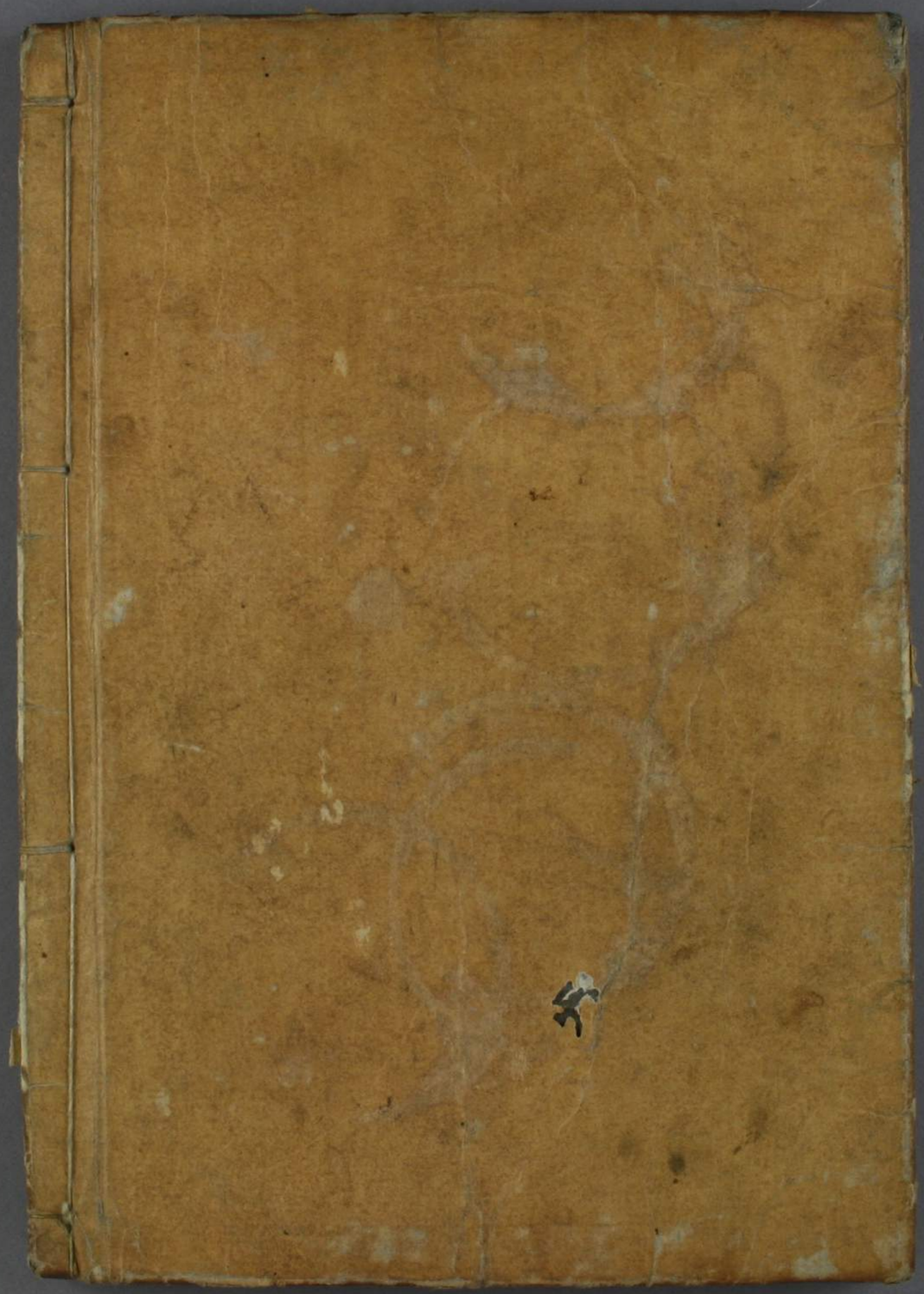
衣子のまゝとわゝて八胸あハゝかつける袖乃度さんゝ

古今奇談莠句冊第二巻終

らく書又がゝ法寺有

貸本此古〳〵第一

らくかゝきよ八大物

かゝ別版物中清

版是ゝ法ゝ